

寄付趣旨

平成 12 年 6 月 8 日

福島の被災された皆様には心よりお見舞い申し上げます。

私どもは、平成 7 年 1 月 17 日阪神淡路大震災で被災いたしました。

その時は、だれもが突然の出来事に何が起きたのか理解が出来ず轟音と物が壊れる音で、戦争がおきたと思った人もいたようです。瀬戸内の緩やかな気候の下、なぜか地震の恐怖を持たなかった私たちは瞬時に町が、がれきの山に変わり、昨日まで元気だった方が亡くなり、空き巣、泥棒が跋扈し、町は人が住まない無法の廃墟と化しました。交通は止まり、ライフラインは遮断され、見渡す限りがれきの街を見てもう二度と立ち直れないのではなにかと思ったのでした。

あれから年月が過ぎ 10 年たったころには御屋敷町だった芦屋は、本瓦の豪壮な家々はもう二度と建てられてはおりませんが、新しい家々がたてられ、今では落ち着いた芦屋の街に戻っています。震災の跡はどこにも見ることはできませんが、その恐怖は私達それぞれの頭に、心の中に深く刻まれています。

私たちが恐怖のどん底に落とされた阪神淡路大震災よりはるかに巨大な東日本大震災は、原子炉の破壊という未曾有の恐怖と不安が重なり、その絶望と不安は想像を絶するできごとです。お慰め、励ましの言葉が見つかりません。

このたび、私が主宰する心身とも、また経済的にも恵まれた最高齢 93 歳、平均 81 歳の 24 名の倶楽部員は全員阪神大震災の恐怖を経験しております。東日本大震災をテレビその他で知り、今回被害にあわれた高齢者の皆さんをぜひ力づきたいとチャリティーバザー開催を計画いたしました。

クラブ会員全員、講師 40 名が力合わせ素敵な作品を提供してチャリティーバザーを開催いたしましたところ、芦屋はもとより、大阪からも御買い上げ協力にお見えいただき、ささやかな収益しか予想していなかったのですが募金、売上収益含め **523,958** 円計上致しました。開催者、作品提供者、一般協力者それぞれの震災に対する協力意識の高さを実感いたしました。本日この金額に、頑張れの気持ちを添えて御寄附にお伺いしたわけです。

私たちの町芦屋も、規模こそ違いますが、がれきと化した絶望の日々・多くのみなさまのお励ましをいただき、乗り終えることが出来ました。今では、町の風情を取り戻し、おかげさまで元気に日々を過ごしております。

皆様にはどうぞ何よりも、お体を大切に、御元気で、次の世代が心のよりどころにできる故郷の街づくりにお力を合わせ、御精進いただきますようお願いいたします。

遠く関西から、復興を願いますとともに心ひとつにして今後も微力ながら応援してまいりたいと願っております。

芦屋リブリークラブ・ジョイフリークラブ

主宰松岡佑字子